
想勇伝

山猿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想勇伝

【Nコード】

N5211A

【作者名】

山猿

【あらすじ】

平和な日常からある日切り離され、なお運命に立ち向かって行く少年の話。

第一話（前書き）

初めてなので読み辛い部分もあると思いますがよろしく願います

第一話

「起きてつたら、もう朝だよ。」

瞼を開けると白色のレースのオーロラが眼前に舞った。それと同時に風が開かれた窓から部屋の中へと入ってきて、澱んだ空気を浄化していく。

僕が小さく呻き声をあげて枕を抱きしめると布団を剥ぎ取られてボクの身は冷たい空気に晒される。

「ったつくもう…。寒いじゃないか。」

なさない声で姉に抗議しつつ僕は朝のまどろみと柔らかなマツトレスの海から身を起せば手を天井に向かって腕を伸ばして関節を解した。

眼を擦りつつ、僕の目の前で仁王立ちして僕を睨んでいる姉さんに時間を訪ねると、彼女はいつそう不満げな表情を僕へ向けた。

「もう9時をまわってるわ！学校が休みだからってのんびりしすぎなんじゃないの？さあ、さっさと起きて朝ごはんを食べて頂戴。いつまでたっても片付けられないでしょ。」

そう言った後に、わざとらしく彼女は大きくため息をつく、部屋から出て行き乱暴に扉を閉めた。扉を閉めた時の余りの音の大きさに僕は身体をビクリと震わせると、肩を竦めてモッブ付きのスリッパに足を突っ込んだ。

階段を下りていくと食器を洗っている姉の姿が見えた。僕が席へとつこうとすると、「手は洗ったの？小さい時からあなたは何度言っても…。」と説教が始まりかけたので、すぐに手を洗いに水が溜めてある桶のある家の裏へと向かう。外へ出ても彼女がまだ何か言ってる声が聞こえる。クドクドクド、こうなったらホント長いんだよな。

手を洗い改めて席につくと父がいないのに気づいて「父さんは？」と彼女に尋ねる。彼女は僕に背を向け食器を洗いながら「早朝に

何かバタバタ出てつたみたいよ？たぶん新しい鉦脈でも出たんじゃない。」と素っ気なく言った。僕の父親は鉦山の上級管理職で早朝に出て行く事は滅多にない。暇だったし、何があったのか興味もあったので、一刻も早く出かける為に急いで朝食をかきこもうとしたんだけど彼女の味付けの濃い事。すべてを胃に納めるのに随分と時間がかかってしまった。

寝巻を着替えて外に出て歩き始めると、荷台を積んだ馬車が後ろから近づいてくる。後ろを振り向くとすぐに解った。あんなくたびれた馬を今でもコキ使ってるのはルドルフじいさんしかない。

これで馬車の運賃をいくらか節約できる。郊外にある僕の家は鉦山までは遠いのでかかる運賃も馬鹿にならない。

「やあ、それ鉦山までの届けものだろ?? ついでに僕も鉦山まで乗せてつてよ。」

ルドルフじいさんは僕を一瞥すると「ゼファイレッリのセガレか？乗りな。」と一言。止めるどころか、速度も落とさずに荷台を指で指す。まあ、主人と同様に荷台を引いてる馬も老いぼれて大したスピードも出ないから容易に乗れるんだけどね。

荷台に腰掛けて、流れていく麦畑を眺めると、所々で刈り入れに精を出す人々の姿が見える。そうしていると、だんだんと瞼のカーテンが僕の視界を遮って行く。気づいたら僕はいつの間にか寝入ってしまった。

不意に身体が倒れて衝撃で目を覚まして眼をあけると目の前には色あせた荷台の床が見えた。ルドルフのじいさんは僕の身体を押し退かすと、さっさと荷台の荷物を下ろし始めたようだ。借りを返すつもりで下ろすのを手伝う。彼は荷物をすべて下ろすと、礼を言う僕を見もせずに行ってしまった。まあ、ルドルフのじいさんはいつもこんな感じだから笑って礼を返されたら逆にジンマシンが出るけどね。

鉦山の事務所にいくと、アニスの母親で事務員のセリスさんがいて、部屋の端にある椅子では眼鏡をかけて幼馴染の赤毛のアニスが

額に皺を寄せて分厚い本とにらめっこをしていた。

「あらコーネフちゃん、珍しいわね？一体どうしたの？」

僕に気づいたセリスさんが、心が晴れやかになるような笑みを浮かべて僕に尋ねた。

「いや、父に会いにきたんですが、父は何処にいますか??」

そういつと彼女は困ったような顔をして顔をしかめた。

「うーん…今、会議室で会議に出席しているのだけれど…。いつ終わるかは私にもちよつと解らないわ。」

彼女が悪い訳でもないのに、そうとてもすまなさそうに言った。

「では、父が帰ってくるまで待ちます。どうせ暇で来ただけですから。」

そう言つて、僕はアニスの隣の椅子に腰を下ろした。

「やあ、アニス。元気？」

いつまでたつても、まるで僕が存在してないように振舞う彼女に流石に業を煮やして、そう話かければ、彼女は眼鏡のズレを治し眼を本から僕の顔へと向けた。

「ヒトが本を読んでいるのに、うるさいわねえ。少なくとも、あ

なたがくる前までは元気だったわ。」

母親と違つて彼女には、まるで愛想と言うものがない。僕がもし、彼女は橋から拾われた子だと聞いたら、まず疑わないだろう。やさしいセリスさんの子供とはとても思えない。

「そういえばコーネフ。宿題は終わったの？まあ、あなたの事だから、まだだとは思うけど、この前みたいに見せてなんかあげないんだからね。」

この街は農業と鉱山で成り立っていて、刈り入れの時期は農家の子は家の仕事を手伝わないといけないので、学校が2週間程休みになるのだ。僕やアニスは親を手伝う必要が無いので、宿題をどつさり出される。その休みが、あと三日程で終わるのだが、まだ僕は完全に終わらせてはいなかった。

「そんな事、言わないでよアニスだけが頼りなんだからさ。」

僕は苦笑し手を合わせて、お願いすると、彼女は僕を一瞥して再び目を本に向けた。僕が小さくため息をつく、扉を開けて父が入ってきた。

「なんだ来てたのか？」

父は入ってくると、そう僕に声をかけた。早朝から働いていただけあって大分疲れている様子だ。横のアニスは本から目を離すと、「こんにちは。おじ様。」と言、頭を下げた。

「姉さんに聞いたら日の出前に出勤したようだけど何かあったの？」

そう父に尋ねると父は肩を竦めて、目を泳がせつつ水差しから水をグラスに入れた。

「実は、他言しないように言われてるから答える訳にはいかないんだ。まあ事故って訳じゃないから安心してくれ。」

父は困ったような笑みを浮かべてそう言つと、グラスの中の水を一気に喉に流し込んだ。

結局、しつこく聞いて父を困らせるわけにもいかないし、特にする事もないので適当に雑談を交わした後、僕は事務所から出た。ふと鉱山の入り口を見ると皇国の役人が鉱山の中へと入って行くのが見えた。鉱山周辺に広がるサウスサイドの町は大きいんだけど皇国の役人様が来る事なんて珍しかった。大規模な金脈でも見つかったのかな、なんて僕は気楽に考えていたのだけど、それが違う事が解ったのは後になっての事だった。

第一話（後書き）

感想等頂ければ嬉しいです。

第二話

三日後、学校が始まった。僕が通うのはサウスサイド郡中等学校。ここに通う事ができるのは、基本的に、ある程度裕福な農家の子や鉱山で働く管理職や技術職クラスの師弟なんだけど、難しい試験にパスすれば授業料が免除される。僕は前者でアニスは後者だ。

僕は教室に入って友人なんかとおしゃべりを楽しんでいると始業の鐘が鳴るのが聞こえた。いそいで席についてしばらくすると、担任のアドルフ先生が入ってきた。

アドルフ先生は温厚で優しい先生で、この人、実はルドルフじいさんの息子っていうんだから驚きだ。セリスさんとアニスの逆バージョンだね。

先生は開口早々に、みんなに宿題の提出を求めた。周囲はざわついて悲鳴も聞こえる。

僕はというと、宿題は無事に提出する事ができた。なんだかんだ言って結局アニスに何度も頭を下げて手伝ってもらったんだけどね。彼女はこの学校でも三本の指に入る程、成績がよかった。ちなみに、彼女は成績以外でも男子からの人気も上位に食い込んでいた。そばかすはあっても顔は整っていたし、髪も綺麗だしね。あの性格だからラブレターなんて出す男子はあまりいなかったけど。

確か、一度だけ彼女は男子から贈り物を押し付けられた事があるんだけど、細かい装飾がされた櫛だったかな？その処分に困った彼女は、なんとそれを僕に押し付けた。今は僕の姉さんが使ってるけど、まあ捨ててしまわないだけマシなのかな？

今日の授業は、午前中は皇国史と変化魔法の授業。午後からは生物と数学の授業だった。実は僕は数学がかなり苦手なんだけど今まで何とかアニスのおかげで何とか赤点を取らずに済んでいた。

用務員さんが最後の授業の終了の鐘を鳴らすと、まわりはため息の嵐。アドルフ先生は苦笑していた。

「よし今日はここまで、休みのせいでみんな少しだらけてるんじゃないか？ 麦の刈り入れで忙しかった連中は明日までに疲れをしつかり取っておくように。」

そう言つて先生は教室から出て行くと、みんなも一様に教科書を鞆へ入れ帰っていく。アニスはと言えば自分の席で、またぶ厚い本とにらめっこをしている。あいつもよく飽きないよな。

「アニス？ 帰らないのかい？」

そう訊ねるとアニスは顔を上げて僕を見た。彼女の三つ編みが揺れる。

「うん、これをもう少し読んでからね。」

彼女の持つてゐる本を見ると、これは確か高等部で使う変化魔法の教科書だ。

「真面目だなあ。アニスは。ちよつと勉強しすぎじゃないの？」

僕は僕なりに彼女を心配したつもりだったんだけど、彼女は「あなたは勉強しなさすぎよね。」と微笑みつつ僕に言葉を返すと、再び目を本へと向けた。返す言葉も無い。

友人と遊んで、しばらく雑談をした後に家へ帰る。玄関の扉を開けると何か甘い匂いがした。階段を上がり部屋を出る途中で、ふと姉の部屋を見ると扉が開いていたので、姉の姿がちらつと見えた。疑われたら困るから言っておくけど決して覗いた訳じゃないよ。姉はアニスの為にプレゼントされたはずの櫛で髪をといていた。きつと甘い匂いは香水の匂いなのだろう。それにしても、二階から玄関まで匂いがするなんて付けすぎだ。

部屋に入つて着替えると、僕は居間に寝転んで冒険小説を読み始めた。しななくして、姉が居間に入ってくると姉は呆れたような表情で僕を見下ろす。

「ちよつとコーネフ何やってるの？ 今日ホークマンさんの家で鉱山設立記念日のパーティーがあるのよ？ そんな小汚い格好でいく気じゃないでしょうね。」

姉はそういうと小さくため息をついて、クローゼットから僕のタ

キシードを取り出した。姉はクドクドと煩いけど何かと僕に世話をやいてくれる。

ホークマンさんっていうのは鉾山の総合管理者。ようするに社長と言ったところかな。何かたまに自己陶醉したような話し方をする人で僕はあまり好きじゃなかった。

身支度を整えて玄関へ向かうと父も母も正装で外出の用意をとつて済ませていた。僕はパーティーの事なんて、すっかり忘れてたんだけど、やはり僕の家族はみなしっかりしている。辺りは日が沈みかけていて僕らは馬車で街の中心部へと向かった。

街の中心部にある高級住宅街。そこにホークマンさんの邸宅はある。僕の家も一般の人よりは広い方だけど、彼の邸宅に比べれば僕の家はウサギ小屋だ。邸宅に近づけば衛兵が招待状と不審な物を馬車に積んでないか調べる。彼らの無愛想さと言ったらアニスといい勝負だろうね。

馬車を駐車し、案内されてホールに通されたんだけど、ここがまた広い。きつと、鬼ごっこなんてしたら楽しいだろうな。そんな事を考えているうちに会場に通される。パーティー会場に通されると色とりどりの衣装に身を包んだご婦人や並べられた料理が目に入った。父はさつそく同僚や上司の人に挨拶をしている。こういうの雰囲気は苦手だし何より料理が無くなってしまわないか心配だったので、僕は早々に料理の並べられたテーブルへと足を進めた。料理の目前にした所で服がグイッと後ろへと引っ張られる。振り向くと綺麗なドレスに身を包んだアニスがニヤニヤしながら立っていた。髪はいつもの三つ編みじゃなく、そのまま下ろしていてまるで夕日の帽子をかぶっているみたい。

「アニス！！なんでここに??」

僕が目丸くして彼女を見ていると彼女は得意げな顔で笑って手を後ろで組み身体を少し屈めて僕を見た。

「なーに？なんで私みたいな事務員の娘みたいな身分賤しき者が、こんなトコにいるのかって事？」

僕は慌てて否定する。

「いや、そんな事、思っ
てないよ。えっと…その…」

何かうまい言い方を必死で考えていると、彼女はクスクスと笑い始めた。

「解ってるわよ。そんな事くらい。」

やられた。完全に彼女の方が一枚上手。

「あなたのお父様に特別ご招待いただいたの。まったく、貴方とは違って優しく、できたお父様ね。貴方と血が繋がっているなんて、とても信じられないわ。」

その言葉、そのままそっくり返す。

第三話

僕が料理を盛り始めると、彼女も見様見真似で料理を皿に盛っている。彼女は料理の食材が珍しいのかキョロキョロと料理を見回して落ち着かない。

「そうキョロキョロしていると田舎物だと思われるよ。」

彼女の耳元でそう囁くと、彼女は僕を睨んで思い切り抓った。まったく、すぐに暴力に訴えるんだよな。

誰か僕の名前を呼ぶ声が聞こえて振り向くと、僕の家族は既に席について僕らが来るのを待っている。彼女もそれに気づいたようであり、いそいそと家族が座る席へと歩みよった。

「今日はお招きいただきありがとうございます。」

アニスが頭を下げると、父は微笑んだ。

「いや、どういたしまして。沢山たべて、楽しんでいってください。それじゃあ、頂こうか。」

そう言って父はワイングラスにワインを注いでいく。僕とアニスの席には既にフルーツジュースが注がれたグラスが置かれていた。

乾杯をした後に談笑を始める。うちの親ったらさ、直ぐに学校での僕の評判はどうか？とか、先生に怒られるような事ばかりしてないか？なんて不愉快な事を聞き始めるんだよね。内心アニスが僕の宿題を手伝った事をいつ言うのかドキドキしてただけで、アニスは一向にその事は話さなかった。無難な事しか言わないし、もしかして気を使ってくれてるのかな？

弦楽器や打楽器による演奏が始まる。さすがホークマンさん、やる事が豪華すぎるね。次々とみんな、パートナーを見つけて踊り出していく。さっそく姉は長身で格好のいい人に誘われて踊りにいった。でさ、こういう時に限って母が二人も踊ってきなさいみたいになっちゃうんだよ。確かに僕はさ、知らない女の子をダンスに誘えるような毛の生えた心臓は持ち合わせていないんだけど。でももう少

し息子を過大評価したってバチはあたらないと思うんだけどなあ。

まあ、当面の問題はだよ。母がそう口にした事で僕はアニスをダンスに誘わないといけない状況になった訳だ。とりあえずジューズを一口飲む。甘酸っぱさが口を支配した微かな甘味を残して消えていく。とりあえずアニスを見てはいけない。怖気づくに決まってるんだから。椅子を後ろにずらして、ゆつくりと立ち上がるんだ。そしてゆつくりとアニスの方を見る。上からはアニスの夕日色の後頭部が見えるのでそれに向かって話かける。

「その…アニス、一緒に踊ろうか？」

彼女の髪がオーロラのように揺らめいて顔が僕の方へ振り向きはじめる。一瞬の事のはずなのにとてもスローモーションに見える。僕の視線と彼女の視線が交わる前に僕は彼女の顔から目を逸らした。

「えー…。コーネフとお？」

そら見る、そう思った瞬間に僕の手にも毛布がかけられたみたいに柔らかな感触と熱い体温が被う。

「いいよ、どうせ私くらいしか貴方の誘いにつてくれるお人よしの女の子はいないでしょうからね。」

彼女は微笑みを浮かべてそういった。これは想定外。少々混乱しつつ、彼女の手を引いてホールへ立つと、音楽に合わせて足を進め始める。足を進めたと同時に彼女の身体がヨタヨタともたついた。

「何やってるんだよ、アニス。」

そう小声で囁いて彼女の顔を見る。彼女は顔をキツと上げれば眉を顰めた。

「だって、踊るのなんて初めてなんだもん、仕方ないでしょ？」

「はあ？」

そう言ったと同時に誰かの肩にぶつかる。ここで戻るのは正直きびしそうだ。

じゃあ、最初から断っておけばよかったのに、といいかけてやめた。言い争ってる暇なんてない。ここは僕の腕で何とか踊りきるしかないといっても僕の腕なんてたかがしれてるけど。

「とりあえず、手を離さないでよ。そして足のリズムを合わせるんだ。」

「う…うん。」

彼女が足元を見つめながらそう呟く。

「足元ばかり見ない。他の人にぶつかっちゃうだろ??」

「ご、ごめんなさい。」

いつも、すべてにおいて完璧で、勝気な彼女がこんなにオタオタしている。ごめんなさいなんて二度と、彼女の口から聞く事ができないかもね。声を保存する道具があればいいのに。そう思った瞬間に彼女が前へ倒れてきた。彼女の全体重が僕へとかかる。

「いったあ…」

暗闇で彼女のか細い声が聞こえる。周りはザワザワとざわめく声も聞こえる。彼女のお尻がお腹に乗っているようで痛い。

「アニスっ…苦しい…ど、どいてっ」

親切な紳士と婦人の手伝いでようやく僕らは起き上がると礼を言っ
て足早にダンスホールから出た。二人とも息を切らしてお互いの呼吸音が重なり合う。

「もう、下手糞なんだから。」

アニスが言う。

「アニスが最初から踊れないって言うておけばよかったんじゃないか。」

そう言うのと、ダンスホールから戻ってきた姉が口を挟む。

「あらコーネフ? いかに上手に踊れるかどうかは男性の手にかか
ってるのよ? 女の子のせいにするなんてみつともないわね。」

姉がにやにやと笑いながらそう言うてアニスと向かって「ねー。
なんて声を合わせている。こうなったら男がかなう筈もない。おと
なしく、ここは撤退しよう。」

席に戻って、食事続ける。周囲はみんな楽しそうに踊って談笑
している。アニスがいて、家族が笑って、そんな風景を僕は生涯忘
れる事はないだろう。

第四話

麦の刈り入れも終わって、いよいよ暑さも本格的に蝉が泣き始める。鉾山の創立記念パーティーから2週間後、隣国のシユリアス連邦国のマリマス郡に向かつて僕の住んでる国であるカノツサ皇国が侵攻を開始するらしい。僕らが住んでいる地域周辺は高山帯によって三つの国の領土が分けられている。南に行けばシユリアス連邦国西に行けばアウグスト王国。シユリアス連邦国は僕らの国と同じくらいの大きさだけど、アウグスト王国はシユリアス連邦国やカノツサ皇国に比べれば小国だ。聞いた話によるとここには父の親戚がいるらしい。

カノツサ皇国とシユリアス連邦国の間を分ける高山帯には少しだけ切れ目があつて、それを塞ぐ形でそこにはシユリアス連邦国が建設した砦。イルハン城砦がある。

僕らの住んでる、この一体の地域は鉾脈が走っていて、僕らの街の鉾山はまだ採掘量が小さい。そこで皇国としてはイルハン城砦の向こうにあるマリマス郡の鉾山を狙っていると言う訳だ。

こうなつたのも一週間前、皇帝陛下が崩御されて皇帝の兄君と弟君のどちらが次の皇帝になるのか決まっておらず強硬派の宰相が軍隊の運用権を握っている為だ。

そういうことで、僕らの住んでいるラーズ市にも今日、軍が進駐してきた。吹奏楽隊の軽やかな音楽で皇国兵が行進して行く。明後日にさつそく城砦に向けて進軍するらしい、行進して行く兵士の人の一部は死者の列に加わらねばならないのだろう。

戦況は我が軍、有利である！！そう軍は発表した。でも噂によれば部隊の約三割を失う敗北だったらしい。それは軍の出した命令にも現れていた。

『ラーズ市二居住スル12歳以下ノ子供、及ビ婦人ハ、シャクセン郡へ疎開スルモノトスル。ソレ以外の皇国男子ハ軍ノ後方支援ヲ

担当スル事を命ジル。」

おそらく、大勝利したシュリアス連邦国はこの流れに乗って、ラーズ市含む、この周辺地域に攻め込むつもりだろう。要はこの周囲の地域は戦場になると言うことだ。女性と子供は三日後に北のシャクセンへ疎開するらしい。もちろん学校は休校になった。

その二日後、僕とアニスは街を見下ろす丘のササギの木の下で待ち合わせをした。待ち合わせの時間の少し前に来たつもりだったが、アニスはもう既に木の下で座っていた。丘の緑にアニスの来ている白い服が映える。

「遅いな。コーネフ何やってたの??」

彼女は僕を見上げれば頬を膨らませてそう言う。

「だって、まだ街の鐘は鳴ってないよ。アニスが早いんだよ。」

僕は小さくため息をつけば肩を竦めた。アニスは「まあいいわ」と夕日色の長い髪を掻きあげる。

「明日、ついにいつちゃうんだね。疎開先で、いくら珍しい食べ物があったってドカ食いしてお腹壊したなんて事にならないようにしなよ。」

僕はアニスの傍に座ると、顔をニヤつかせながらそう言った。

「うるさいわねー。コーネフこそ身体がひよろいんだから、兵糧運んでる途中にぶっ倒れるなんて事にならないように気をつけないとね。」

彼女も負けじと言い返す。僕らは顔を見合わせるとケラケラと笑った。何でだろう、なんかとても可笑しかったんだ。

しばらく雑談をしていると、彼女は唇を動かすのを止めて黙り込んだ。

「どうしたんだい?アニス?」

そう聞くと、彼女の細い指が僕の肩をギュツと掴む。

「コーネフ、絶対に死んだりなんかしたら駄目よ。敵が攻めてきたら逃げるのよ。かつこ悪いなんて思ったら駄目。小さい頃から弱虫のあんたなんか勝てる訳ないんだから。」

何故かそう言った時の彼女は迫力があつた。僕は目をきよんとさせたまま、「う、うん解ったよ」とだけ、なんとか声に出し頷いた。

姉に買い溜めを頼まれて、それを終えた頃にはすっかり日が傾きかけていた。僕は自分の部屋で必死に勉強をしていた。だって休校中でも勉強を欠かす事が無いようにって、アドルフ先生がたつぷりと宿題を出してくれたからね。

日が沈んで、しばらくたってから父が帰ってきたらしく父の声が聞こえる。そうしてしばらくたつと僕の部屋の扉がノックされる。

「父さんだ、ちょっと大切な話がある。入るぞ。」

僕はどうぞ、とノートに筆を走らせつつ言つとドアを開く音がする。「率直に話すぞ。今からお前はこの子を連れておじさんの所に逃げなさい」

「はあ？」

そう言つて振り向くと、いつもと違って厳しい顔をして立っている父の隣に少年、いや髪を針のように短く切ったアニスがいた。

第四話（後書き）

やっと、序章が終わり物語が動いて行く感じですよ。

第五話

「アニス…。」

喉からようやくその一言だけ搾り出す事に成功した。アニスは黙ったまま俯いている。顔が少し赤いのは少し泣いたのだろうか。

「父さん…??」

そう顔を父の方へ向けた。父は厳しい顔をしたまま話を続けた。

父の話によると、今日、父は仕事が残っていて一人で仕事場に残り仕事をし帰る時に役人の話を聞いてしまった。麦の刈り入れで学校が休みになって父の職場を訪ねたあの日発掘されたのは何かの遺跡だったそうだ。父が役人から盗み聞いた話によるとそこで女、子供を人柱に捧げ何らかの儀式をする事になっていて明日、疎開する話になっている女性や子供はその儀式に使用されるそうだ。それを聞いた父はいそいで自分の親しい友人にその事を話して回ったのだが、信じてくれたのは事務員のセリスさんと数名だけだったそうだ。

「いいか、父さん達は色々準備して向かう。セリスとも合流しなければならぬからな。それに大人数で行くとアシがつきやすい。お前達だけで先に出発しなさい。」

「で、でも…。」

父は僕をキツと睨むと僕の両肩を掴み僕の瞳をみつめた。

「コーネフ、お前はもうすぐ元服だろう? もう立派な大人なんだ。なあに父さんの子だ、うまくできるさ。」

父は笑うとそういつて首にかけた銀細工に石の嵌ったネックレスを取り僕の首へとかける。

「お守りだ。持って行きなさい。」

そういつて僕の肩を軽く叩くと軽く頭を撫でた。なんだい、大人なんて言っておいてまだまだ子供扱いじゃないか。

母に目を向けると、母は大粒の涙を流している。僕はそっと母の

手を握った。

「母さん心配しないで。向こうでまた会えるじゃないか。」

「そうね…。気をつけるのよコーネフ。あなたはいつだって詰めが甘いんですからね。」

さすが母親、解ってるね。そう思っただけで苦笑すると急に視界が暗くなり顔が圧迫される。

「わっ、姉ちゃん…やめっ…苦しい。」

そう言っただけで、もがくと漸く身体が開放されて、姉の不思議そうな顔が視界に入る。

「あれ？なんで私だけ解っちゃったの？？」

「そりゃあ、あんな胸が小さいのは姉ちゃんしかいないからね。」
すかさずゲンコツが飛んできて僕は頭を抑える。

「もう、あんたってコは最後まで生意気なんだから。軟弱で頼りないけど、ちゃんとアニスちゃん守ってあげんのよ。」

姉はそう言うのと母に付き添った。父が茶色くなった古い地図を持ち出し脱出方法を説明しはじめる。

父の話を要約すると、まず僕らはラーズ市を出てまっすぐ西へと向かう。そこには父や一部の人が知らない昔使われていた坑道があつて、そこから山脈の谷間を流れる川へと抜ける事ができる。船は古い船がいくつかあるのでそれを使って川を下り、アウグスト王国に入る。川沿いに街があるので、そこまで行けば馬車でおじさんの住むカマラまで行く事ができるそうだ。

僕は急いで旅の準備を始める、といつても持ち出さなきゃいけないような大切なものなんて僕にはないけどね。それに旅行じゃないんだからあまり大きな荷物は持つ事はできない。最低限の荷物を持てば僕は部屋の扉を閉める。絶対にこの家、この部屋に帰ってくるんだ。

階段を下りるとアニスはまだ俯いたまま心ここに在らずと言った感じだった。

「いつてきます。」

家族にそう一言いうとアニスの肩に手を置く。

「アニス…行こう?」

そう声をかけるも彼女からは返事がない。僕は家の扉を開けると彼女の手を強引に引いて家を出た。

第六話

外は真つ暗だ。まあその方が逃げるのは都合がいいけど。家を出て暫く歩くと刈り入れの終わった畑が広がっていて、その後はただ平原だけが広がる。月あかりに照らされて地面に映るのは二人の影だけ。ザッザッザッと草を踏む音だけが辺りに響いた。そして僕は急に足を止める。

「アニス、君はいつまでそうやってるの??」

厳しい顔を彼女に向ければ彼女の服をグイッと掴み持ち上げる。

彼女の首はクタリと横に倒れた。

「君だってもう一度家族に会いたいだろう? だったら今は頑張つて逃げ延びるしかないじゃないか!」

彼女の頭を両手で支えれば彼女の目を見つめる。彼女と一瞬目が会っても彼女の瞳から再び僕の顔は消えていった。一瞬見えた彼女の瞳は絶望と虚無の混合色に彩られていた。

「絶対に、逃げ延びて新しい地で僕らの日常を取り戻すんだ。先は見えないけど歩みを止めたって何も見えてこないよ。」

「うん……」

アニスは蚊の鳴くような声でそう呟いた。まだ元気はないけど、何とかともに歩くくらいはしてくるようになったので、少し安心した。

洞窟にたどり着いた頃にはもうクタクタだった。地平線からの光は空に浮かぶ雲を照らして空を真つ赤に染めている。

この辺りはずっと昔に父と来た頃と全然変わっていない。まるで人間のような形の岩の傍ら、その坑道はある。

「ほんとに……ここに入るのコーネフ。」

坑道に入ろうとするとアニスが不安げにそう言った。

「なんだ、もしかして怖いのかい? アニス?」

「そ、そんな事ないけど。」

そういえばアニスは子供の時から暗い所が苦手だったな。アニスは子供の時は女の子とお人形ごつこと言うよりも、むしろ男の子と冒険ごつこに出かけるようなタイプだった。

彼女は木登りも棒切れを使ったチャンバラごつこも得意だったけど、暗い廃屋に入るのだけは本当に嫌がって無理やりその中に彼女を入れようとした僕は力いっぱいグーで殴られた事がある。

「大丈夫だよ。この坑道はほとんど一本道だから迷う事もないし、それにここはいくら暗い場所が嫌いな君でも気に入ると思うよ。」

「どういう意味？」

「まあ、ついてきなよ。」

そう言って彼女の手を引くと、坑道の中へ入って行く。狭い坑道の中を歩いて行くと急に広い空間に出る。

「わあ……すっごい」

今まで不安そうな表情をしていた彼女は目を大きく開くと辺りを見渡し興奮した様子でそう言った。

「だから、気に入ると言っただろう？　しかしこうやって徐々に来ると圧倒されるなあ。」

この広い空間には強い光を放つヒカリタケが自生していて、まるで星空のように見える。彼女は感嘆の声を上げてそれに魅入っていた。これで少しは彼女の気が晴れてくれればよいのだけだ。

第六話（後書き）

もう少し書くつもりだったのですが、いい所でうまく切れそうだったので区切りました……

第七話

ヒカリタケの淡い光を浴びつつしばらく歩くと、また坑道が狭くなって行く。

「ねえ、コーネフ。本当に大丈夫なんだろうね？」

アニスは不安げに僕の腕を掴めば、そう僕に尋ねた。

「大丈夫だって。心配性だなあ。あ、ほら、遠くに光が見えてきただろう？」

遠くに白い光が差し込んでいる。アニスも歩き疲れていて相当にへばっているみたいだけど、そんな事よりも坑道から早く抜け出したいらしい。休憩しようか？と聞いたけれど、大丈夫だから早くとせかされてしまった。

坑道から出ると其処は猫の額程の川原。上を見上げると高い崖が切り立っていて、狭い空が見える。川の流れだけがその殺風景な光景に彩りを与えていた。川原には古い舟が何艘か置いてある。昔、父から聞いた話によれば150年程前にここがずっと昔に坑道として利用されていた頃はここから隣国のアウグスト王国まで鉱石を舟に乗せて運んだりしたんだそうだった。

川に舟を浮かべる。船は大分昔のもののようにだけれど丈夫に出来るようで、僕とアニスは協力して、その船を川沿いへと移動させた。

ズボンの裾をまくって川へ足をつける。冷たい流れが僕の皮膚を通して身体へと伝わってきた。ほんと冬じゃなくてよかったよ。

「さあ、アニス乗って。」

舟の半分を川の中へと引き込むとそうアニスへと呼びかけた。

「乗った瞬間に船底が破れる…なんて事にならないでしょうね。」

アニスは不安そうな顔をしつつ、船へと乗り込む。船底は僅かに軋んだが、アニスの身体を受け止めた。

「アニスは心配性だなあ。それとも最近体重でも増えた??」

アニスはむっとした表情をして僕の頭をオールで叩く。

「無駄口叩かないの。ほら、さっさと船を引っ張って。」

はいはい。船を引っ張るとガリガリと嫌な音をたてた後、ずっと水面に浮かんだ。舟に飛び乗ると船は川を下りはじめる。川を下るだけだから、オールで漕ぐ必要はないけれど、舵は取る必要がある。はじめは慣れなくてアニスにも結構どやされたりもしたけれど、慣れてしまえばこっちのもの。1時間たつ頃には、船をすっかり自分の手足のように操れるようになっていた。

「静かだね。」

アニスは腕を川へとつけ、その流れを見つめながら呟いた。

「うん……」

周りから聞こえる音と言えば崖に根付いた木々のざわめきと鳥の声、川の流れ。そしてアニスの声。

「私達、これからどうなっちゃうんだろうね。国を捨てて逃げて、向こうでちゃんと暮らしていけるのかな？」

そんな事、僕には解らない。でも僕達には選択の余地なんか最初から無かった。

「不安なの？今、色々考えたって仕方ないよ。今から川を上って皇国へ帰るなんて事も不可能だからね。だから今は僕らができる最大限の事をしようよ。」

「うん……。」

アニスは小さく頷く。次の瞬間船が急にひっくり返った。

「アニス！！！」

必死に水面から顔を出して彼女を呼ぶけど返事はない。気づかないうちに川の流れも急になっていったようだ。くそっ、何でこんな事に。

もう波立つ川の音しか聞こえない。僕の視界には黒いカーテンがゆっくりとかかって行き、何も考えられなくなってしまった。

第七話（後書き）

少し話のテンポが遅いと考えますが、少し長い話になる
と思うので勘弁してやって下さい。

第八話

「おい…おい、おいあんた。目を覚ましなよ。」

「ううーん…姉ちゃん。あと五分…」

そう言つて寝返りをうつと、ふと我に帰る。目を覚ますと呆れたような顔をした浅黒い肌の女性が視界に入った。

「うわっ、すっ、すみません。僕は…そうだ！もう一人、川から人が流れてきませんでしたか？」

「ん？？一緒に流れていた子か？それなら、とつくにジャックが助けているよ。もう少し上流の所だが。」

彼女はそう言つと川の上流の方を指さした。彼女の格好…傭兵か何かだろうか。彼女に案内されて上流の方へと歩いて行くと、火が焚かれている傍らに人がいる。

「あ、伍長。もう一人の人は助けられたんスか？」

そういいながら、少年はアニスの服を脱がしにかかっていた。

「わっ！！ちよつと、君っ！アニスは女の子だぞ！！」

慌てて彼からアニスを引つたくる。アニスはまだ顔色は悪かったけど呼吸はしっかりしていた。そりゃあアニスは胸はないし、男と間違えても仕方が無いけどさ。

「ジャック…。あんたは男と女の区別もつかないのかい？」

伍長と呼ばれた女性は額に手の平をあて緩く顔を左右に振った。

「まっ、まさか…。じ、人工呼吸なんてしてないだろうな。」

混乱して、もう言葉も何度も囁んでるんだけど、必死に言葉を紡ぎだした。

「いや、そりゃあ水いっぱい飲んでたし…。」

「なんだって！！じゃあしたのか？したんだな？」

そうして少年に迫っていると、不意に後ろから声がした。

「あのぉ…、人口呼吸をしたら何かまずかったでしょうか。一応しておかないと自発呼吸が不十分だったもので…。」

振り向くと黒い髪の女の子が手に薪を抱えて心配そうな表情を
て立っている。

「しまったよ。ユフラナ上等兵がですけどね。」

少年は肩にかかった僕の手を呆れた顔で払い落として、彼女を指
しそう言った。

「いやあ、この辺りじゃ乾いた木が無くて、遅くなっちゃいまし
たよ。」

薪をもった女の子は笑みを浮かべてそう言って歩き出すと、その
次の瞬間に石に躓いて転び辺りに 薪を撒き散らす。カランコロン
と薪は少し音楽的な音を立てた。

「まったく、何やってんだい」

「今、心の中で転ぶ方に500ティナン賭けてましたよ」

伍長と少年は少女の方へ歩み寄って、少女と一緒に薪を拾い始め
る。

「う…うん…あれ、コーネフ？」

アニスがゆっくりと目を覚ます。そして我に返ったように僕を
睨めば僕を突き飛ばしてゲンコツを浴びせる。

「何すんのよ！！この変態コーネフっ。」

服を脱がされかけていたのを助けたのに、この仕打ち。浅黒い肌
の女性と白くて黒い髪の少女、そして生意気そうな少年は僕らをま
るで見世物のように見て笑っていた。

「まあ、まあ。それよりあんたらここらの人間じゃないんだろう
？事情だつて聞かなきゃなんないし、あんた達には、ちよつと同行
してもらふ。ユフラナ、ジャック。隊商に戻るよ。」

女性はそう言つと、ジャックに焚き火を消すように指示し、ユフ
ラナは僕らの荷物を持つように指示した。

僕らは不安を心に抱きつつ彼らに同行する。

第八話（後書き）

ポリウムが少なくなっている気がする人もいるかもしれませんが、なるべく週の更新を多くしようと思ひまして。

第九話

川沿いから少し出ると、そこは草原。緑の絨毯のような大地が地平まで広がっている。

「とりあえず着替えからだな。その格好ですつといる訳にもいかないだろう?」

隊商に合流すると伍長と呼ばれた女性は隊商の人と数分言葉を交わした後、そういつて僕らに手招きした。

「よし、えつと…。まずあんた。私の着替えを貸してやるからそれに着替えな。ユフラナ。私の荷物に着替えがいくらか入ってるから選んでおやり。」

伍長はアニスを指してそういつと、自分の荷物を馬車から引き摺り出しユフラナへと渡す。

「あの…、そんな私。このままで大丈夫です。お構いなく…。」
アニスがそういつと伍長は肩を竦め、その主張を拒否するように首を振る。

「なーに、言っただい。女の子は体を冷やしちゃいけないって言うのは、私のばあ様のずっと前の世代から言われ続けている事なんだよ。変に遠慮する前にさつさと馬車の中で着替えちまいな。」
そういつてアニスとユフラナを馬車に放り込むと大きい布で中が見えないように馬車の入り口を布を広げて被い、僕らの方に振り向いた。

「あんたら何じろじろ見てんだい?言っておくけど男共は間違っても覗くんじゃないよ!」

そういつて彼女は僕らを睨む。ほんと、不本意極まりない。

「へいへい、了解。伍長。」

ジャックはそんな気はサラサラ無いといった感じで肩を竦めて答えた。

「ジャック、そいつの着替えはお前が貸してやれ。そいつはチビ

だからあんたの服でも何とか入るだろ？」

…なんかこの人、ムカツク。ジャツクは面倒くさそうに返事をすると自分の荷物から着替えを取り出し僕に手渡した。

「何、ボーッと突っ立てるんだい、あんた？」

伍長は訝しげな表情をすると、僕にそう尋ねる。

「いや…僕は何処で着替えたらいいのかなと思って…」

そう答えると彼女は小さくため息をつき、馬鹿にしたような目で僕を見る。

「何、軟弱な事言ってるんだい。男のあんたは野っ原で着替えななめに、あんたの裸を喜んで見たい奴なんかいやしないよ。」

そう言つてカラカラと笑う。そんな事を言われても恥ずかしいものは恥ずかしいんだから仕方がないよね。仕方なく誰にも見られないように馬車の陰で着替えただけ。

僕が着替え終わつてもアニスとは長い間、馬車の中で着替えている。ようやく出てくると、アニスは体にピッタリと吸い付くようなパンツにゆつたりとしたシャツの姿だった。

少しサイズは大きいようだけど、旅に出る時は女とバレないように薄汚れた服を着ていたから、それよりはまだずっと女の子っぽい。随分と時間がかかったな。」

ずっと馬車の入り口の前で伍長は布を押さえていたので、彼女は不服そうに文句をいう。

「伍長の服つてかわいくない服ばかりなんですもん。選ぶのに苦労しましたよ。後で私のを貸してあげますからね。」

ユフラナはそう伍長に言い訳するとアニスに「ねえ」と笑いかける。アニスは居心地が悪そうに笑みを返した。

「うるさいねえ。私は服に興味なんて無いんだから柄だとか形だとかはどうでもいいんだよ。ほら、無駄口叩いてないで、二人共、出発まで装備の手入れと点検！ピクニックに来た訳じゃないよ！」

命令された二人は面倒くさそうにのそのそと作業へと移る。

「そうだ、あんた達には、身元と、この国に来た目的、入国ル―

トを聞かないとね。」

伍長はパサついた茶色い髪を高い所で止めた。僅かな前髪が彼女の顔へ数房垂れていく。

「あの…隊商の護衛の傭兵さんが国境警備までやってるんですか??」

アニスがそう聞くと彼女は大きくため息をつく。装備を点検している二人のクスクスと笑う声が聞こえた。

「私らは立派な正規兵だ。うちの国は金が無いから軍としても、ただ抑止力としてだけで訓練に明け暮れる訳にもいかないんだよ。だから、こうして国境を跨ぐ隊商の護衛をしたりして国庫に少しでもお金を入れなきゃならない訳だ。」

いじけた様な表情でそう言うとな彼女は大きくため息をつく。

「あと、麦の刈り入れの手伝いとかな。」

「家畜の世話は楽しかったですなぁ。」

ジャック、ユフラナの二人が横から口を挟む。

「こら！あんた達！口動かしてる暇があつたら手え動かしな！」

そう彼女が一喝すると二人は肩を竦めて作業に戻る。

「とりあえずだ。信じられないようならここに身分証明書があるから確認するなりなんなりしな。確認したら、話を聞かせてもらおうよ！」

彼女は獣皮に書かれた身分証明書らしきものを僕の目の前に突き出し、不機嫌そうな声でそう言った。

第十話

「で、あんたらの名前は？」

彼女は指で万年筆をくるくると回しつつ首を傾げる。

「えっと、僕はコーネル・ゼフィレッリ」

「私はアニス・グッドマンです。」

僕たちがそう答えると伍長とジャックは目を大きくして僕らの方へ視線を向け、声を揃えた。

「ゼフィレッリだって！？」

ユフラナだけは特に大きなリアクションもせずに「へー、コーネルさんとアニスさんとおっしゃるんですかぁ。よろしくおねがいしますねえ。」とにこにこ笑ってるだけだったけど。

「どうしたんですか？」

僕らが二人のリアクションに困惑してると、伍長がため息をつく。代わってジャックが僕らに説明した。

「ゼフィレッリっていうのは、カマラに住む司教様の血筋しか名乗っちゃいけない姓なんだよ。」

「どういうことですか？」

アニスがそう訊ね、ジャックが説明しかけると伍長がそれを遮った。

「ジャック、後は私が説明するから、お前は作業を続ける。」

ジャックは肩を竦めると、僕ら同様に状況が飲み込めていないらしいユフラナに説明をせがまれ小声でそれに答えていた。

「つまりな、あんたが司教様の血筋の可能性が高いつて事さ。もしかして、あんたカマラに知り合いか何かいないか？」

「ええ、おじさんがいるらしいんです。最も僕は会った事すらないんですけどね。今も父に其処へ行けと頼まれたんです。」

「やつぱりか…。」

伍長は額を押さえた。そうして伍長はしばらく黙って何か考え込

んだ。沈黙が続いてアニスはかなり居心地が悪そう。

「あの…それで私達は、どうなるんでしょうか？」

アニスが限界を超えて沈黙を破ると、伍長は顔を上げた。

「ん…ああ…すまない。いや、すみません。そうだな、司教の血筋である可能性が出てきた以上、私の上司に報告をしなきゃならない。悪いですが、面倒はおかけしませんが、ご同行いただきますですよ。」

伍長がそういい終わると横からジャックが口を挟む。

「あー、駄目ですよ伍長。久しぶりに敬語や丁寧語使ったから、言葉めちやくちゃじゃないスカ。」

「うるさいぞジャック。作業に戻れっ！」

伍長は恥ずかしさを隠すようにジャックを叱り飛ばすと、バツの悪そうに頬を掻いた。

「いや、そんな改まらなくなっただけですよ。僕だって司教だのなんだの訳が解らないし、丁寧な言葉を使われたって伍長さんが使いにくかったらしょうがないですから。」

僕が苦笑していると、伍長は顔を赤くして「申し訳ない」と俯いた。

それから、僕はいままでの事情を洗いざらい話した。別に言わなくてもバレないとは思ったけど、あとで何か発覚した時に気まずいからね。

「隊長、出発の準備終わりました。隊商の責任者の方がタイムスケジュールが遅れてるんだからさっさと乗ってくれとのことですよ。」

ユフラナは敬礼してそう言うと、重そうな装備類を担ぐ。あんなに細い身体の何処にあんな力があるんだろ。僕らは隊商の小さな馬車に乗り込むと、一路アウグスト王国の首都であるラザを目指した。

第十話（後書き）

こちらの都合で忙しく更新する暇が中々ありませんでした。来月半ばまでは忙しいのですががんばってチヨコチヨコは更新していきます。

第十一話

退屈な草原が続いている。ユフラナとアニスは肩を寄せ合ってスーと寝息をたてていた。ジャックは自分の大型の折りたたみ式のボウガンに鼻歌を歌いつつ油を注し、伍長は兵法か何かの書かれた本に目を走らせている。

「あのお…、首都まであとのくらいかかりませんか？」

「あと一日といったところですかね」

あまりにも暇で僕が伍長へそう訊ねると伍長は本に目を走らせたまま答える。

「うまくいけば…の話だけど。」

ジャックがニヤリと笑ってそう言っていると伍長がジャックの頭を手の平で叩く。

「不吉な事を言うんじゃない。まったく縁起でもない。」

伍長は小さくため息をついて叩いた方の手を撫でた。

「でも、伍長。この辺りだって弱いとはいえグラスウルフの群れが襲ってくる事もあるし、油断できないスよ。」

ジャックは頭を撫でながら不満気に文句をいうと、馬車の幌へ凭れかかる。

「そういえば、ユフラナさんとジャックさんは皆さん互いに名前と呼んでるのに、なんで伍長さんだけは階級で呼んでるんですか？」

「ああ、それは伍長が自分のチェロチェロって名前が恥ずかしいからって、普段は階級で呼ぶように…むぐつ、むぐぐ。」

伍長がジャックの口に手を当てて、寄りかかるとナイフを首元に突きつけた。

「ジャックう？あんまり余計な事を言うんじゃないよお？いいコだからね？？」

「ごっ伍長つ。危ない…危ないですってっ。」

ジャックはひきつり笑いを浮かべ伍長の手をペシペシと叩く。結

構怖い人なんだな、この人。そう思っていると馬車の後ろから、ものすごい砂埃をあげて何かの物体が近づいてきた。

砂埃をあげているのは黒い体毛に包まれた物体。緑色の目が五つあり印象としては毛むくじゃらの巨大な蜘蛛。高さは6mくらいはあるだろうか。

「あつ、姉さんつ。マズローですつ。」

ジャックが慌てたような声で叫ぶ。

「ちつ、わかってるよ。おい御者あ！スピードあげろお。追いつかれるぞ！」

伍長が顔を赤くして大声で怒鳴る。

「そんな事を言っただって馬だって随分と疲れてるんだ、これ以上スピードなんてでねえよ！」

御者も同じくどなり返す。

「おいユフラナあ！いつまで寝ている？戦闘だぞ！！」

そう言っただけ馬車内が騒がしくてもアニスにもたれスースーと寝息を立てているユフラナに伍長が蹴りを入れるとユフラナは眉を八の字にして眠そうに目を擦った。

「いったいなあ…もうついたんですかあ？？」

「馬鹿っ！敵だ配置につけ！」

そう伍長が叫んだ瞬間馬車が横倒しになった。目の前が真っ暗になり、馬の悲鳴とみんなの悲鳴が喧騒のコーラスを奏でている。

気づくと僕の顔はアニスの貧相な胸に押し付けられていた。足ににぶい痛みが走る。僕の足は木箱に潰されていて身動きすらとれない。

「おい、くたばってない奴は自分の名前を言え！！！」

そう伍長が怒鳴る。

「ジャック健在っす」

「ユフラナ健在です…。」

呻き声とともに崩れるような物音がした。

「ジャックと私は外の状況を確認。ユフラナは自分の装備品を捜索しろ。魔法が使えても丸腰じゃやられるぞ。コーネフさんアニス

さん聞こえますか？非武装の二人はそこでおとなしくしておいてください。」

僕らの上に覆い被さっていた幌が引き剥がされる厚い日差しが照りつけてそのまぶしさに思わず目を細めた。

マズローと呼ばれた化け物は黒い毛に包まれた触手で幌を口へと運んでもぐもぐとほお張っている。

「う…うん…キヤー！」

アニスは目覚めて、そう呻き声をあげた後、悲鳴をあげ喚きながら僕の顔を引っかき殴る。身動きがとれないから動くことすらできやしない。

「ちょ、ちよつとアニス！！いくら殴っても僕は荷物に潰されて動けないんだったら！」

必死の声でそう叫ぶと、ようやく彼女は手を止めた。

「もう、そんなトコにいるあなたが悪いんだからね。それより目がさめたらこの様は一体どうなってるの。コーネフ。」

そついいながら彼女は自分の胸と僕の顔の間に手を入れて僕の首をグイと引き上げる。変な体勢になって首が痛い…。

「今から音響弾を投げて奴の気をそらすジャックは触手の届かない場所からやつ目の目を狙撃しろ。」

伍長の叫び声が聞こえる。が、このポジションが彼らが何をしているのか検討がつかない。

「ユフラナあ！装備が見つかったなら長槍で奴を牽制しつつ使える最高レベルの炎魔法の詠唱をはじめろ！撃つ時には合図を忘れるなよ。よし音響弾を投げた耳を塞げ！！」

しばらくの間が開いた後、ものすごい音があたりを走り抜ける。キーンという音が耳の奥でうるさいくらいに鳴り続けている。

巨大な黒い毛糸球のようなモンスターは触手をくねくねと動かしている。その毛糸玉に矢が次々と突き刺さって行く。

「ジャック、全然目に当たってないぞ！もつと落ち着いて狙え！」

「そんな事いったって姉さん！あつ！姉さん危ない！！」

そう二人が怒鳴るような声の掛け声が聞こえたと思ったら、伍長に黒い毛の生えた触手がクルクルと巻きついて、伍長の体を宙へと攫っていった。

第十一話（後書き）

仕事はかなり忙しい感じですが少しづつでもがんばって連載していきますので、気長に待っていただけると嬉しいです。

第十二話

「くそつたれがああああ！」

伍長が血管を額に浮かせて触手を刺すも黒い化け物は少しも堪えた様子がない。それどころか伍長をグイグイと締め付けていく。

「ググググググ…ぐあああ」

伍長は顔に脂汗を浮かべて顔を真っ赤にして唸る。

「伍長！！！！」

ユフラナの叫ぶ声が聞こえる。やっと、荷物から抜け出ると化け物に向かって矢を放つジャックの姿が見えた。矢を何度か放つも化け物の目を捉える事はできずに矢を撃ち尽くしてしまった。

「ジャック！！！！もういいからコイツを発破で私ごと吹き飛ばせ！」

「そんな！！んな事できないスよ。」

ジャックが泣きそうになりながら怒鳴り返す。

「何故だ！お前はもう発破の初級研修は終了してるだろ！」

「そういう問題じゃ…」

ジャックがそう言いかけた時に化け物が大きな叫び声を上げる。見上げるとモンスターの目に数本の矢が刺さっていた。触手をくねくねと動かし伍長は宙へと放り出され、地面へと転がり落ちた。

「いたたたた、くそつ。」

伍長がそう言つて呻き声をあげるとジャックが叫ぶ・

「師匠！！」

ジャックの見ている方向を見ると馬に跨った数名の人影が見える。

「あれ？？小隊長さんが来たのぉ？街までは、まだ随分と距離があるみたいけど…」

ユフラナが首を傾げる。ジャックは「おーい」と大声で両手を振っている。伍長は額に手をやり小さくため息をついた。

「ボウガンは落ち着いて狙い、数を撃ち込むより一発一発を丁寧に撃てと言ったでしょう？まだまだ鍛錬の余地がありそうですね。」

僕らの近くまで来ると大型のボウガンを肩に担いだ女性の小隊長は口をきゅつと結んで笑った。

「申し訳ないッス。」

「気を緩めない。トドメを刺す前に気を緩めるといつか命取りになりますよ。」

ジャックの頭をコツンと叩くと小隊長はユフラナの方に向く。

「ユフラナさん、やっちゃってください。大分弱っている様だし、詠唱を途中で止めたその魔法でもトドメをさせるでしょう。」

「あつ、し、しまったつ。ごつ、ごめんなさい。」

ユフラナはへこへこと女性の小隊長に頭をさげると長槍の先を化物に向けた。長槍の先から放たれた炎は化物を焼き尽くしていく。

「ぴぎゃあああああああああ」

化物物は断末魔の叫びを上げて少し暴れ動かなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5211a/>

想勇伝

2010年10月10日00時56分発行